

『太平記』 生成と表現世界

和田 琢磨

本論文は二〇篇の論考からなる。第一部では「生成と歴史叙述」の問題を三章一三篇の論考をとおして考え、第二部では「多様化する表現世界」について二章七篇の論考をとおして考えた。具体的には、第一部では『太平記』の生成と古態本を中心としたテキストの表現世界について、第二部では『太平記』の様々な諸本の表現世界と享受の問題について、検討を加えた。以下に、各論考の概要を述べる。

第一部 生成と歴史叙述

第一部では、まず最初の二つの章において、足利将軍家を中心に据え、生成から表現世界の問題へと考察を進めていった。それを受け第三章では視野を広げ、当時の時代状況を踏まえつつ『太平記』の歴史叙述の問題について考察を加えた。

第一章 初期足利政権と『太平記』の生成

第一節 『太平記』の作者説をめぐる諸問題 — 『難太平記』研究史の検証 —

『太平記』生成に関する貴重な情報を伝える『難太平記』は、『太平記』研究史上最重視されてきた作品の一つである。しかしながら、その研究史は整理されてこなかった。本節では、『難太平記』の研究史を整理したうえで、これまで見落とされてきた『太平記』研究と関わると思われる部分にも言及した。一例を挙げると、『太平記』生成の初期段階で強い影響力を持っていたと推定されている足利直義も、足利将軍家の権威を高めようとする活動に関与していたと判ぜられる場面を取り上げ、『太平記』の生成の問題と関連付けた。これにより、以降で論じる足利将軍家と『太平記』の関係を考察するうえでの足がかりを提示した。

第二節 今川了俊のいう『太平記』の「作者」

本節では、『太平記』の作者論・成立論に多大な影響を与えてきた今川了俊著『難太平記』の「六波羅合戦事」についての内容を、作品全体の構成を視野に入れ、当時の文化・社会状況を見渡しながら考察した。その結果、了俊は当初から足利義満を批判すべく、自家にあった文書類を資料として『難太平記』を執筆したこと、その了俊は、足利家は京都と鎌倉に二つあり、足利家を守るためには都の將軍を否定することもやむを得ないという独自の論理を持っていたことを指摘した。さらに、彼が強い関心を抱いていた『太平記』の「作者」は「恵珍」とそのほかの人物に分けられ、「恵珍」は『太平記』に権威を付加させる存在であったのに対し、そのほかの「作者」は、了俊の意に沿わない叙述をした批判すべき対象となっていると考えた。研究史上問題となっている「玄恵」のことは、了俊は「作者」として認識していないということも確認した。

第三節 『太平記』世界の変貌

『明德記』は足利將軍家周辺で成立した相国寺供養記事で終わる將軍を賞賛した作品である。また、初期形態の『太平記』も、足利將軍家が自家の権威を高めようとしていた頃にその活動に関与していた直義の管理下で誕生した、天龍寺供養記事で終わる作品であったと推定される作品である。このような点を確認したうえで本節では、南北朝期の足利將軍家周辺の状況を踏まえ、初期形態の『太平記』の構造は『明德記』のそれと似たものであったのではないかと推測した。さらには、当時の作品は將軍家を賞賛するものが一般的であるのに対し、現存形態の『太平記』は將軍家をも批判している。その特異性を指摘した。

第四節 軍記物語の生成と享受 — 南北朝・室町時代初期の様相 —

『明德記』は同一作者が改訂した本も伝存する珍しい軍記物語である。本節では『明德記』が乱後一年以内に成立したであろうことを指摘したほか、再稿本（陽明文庫本）の増補記事の検証から『明德記』作者は足利義満の権威を説くために本作を執筆したことを確認した。また、『明德記』を基に作られた謡曲『小林』の検証などを通じて、軍記物語が如何に享受されていたかを具体的に明らかにした。そして、以上のような生成から享受に至る展開は、『太平記』について考えるうえでも極めて示唆的であると考えた。

第二章 相反する将軍像 ― 尊氏像と義詮像 ―

第一節 功績者尊氏像の形象法 ― 奏状の論理をめぐって ―

本節では、足利尊氏と新田義貞の対立の発端である巻十四の奏状を詳細に検討し、『太平記』作者の尊氏に対する配慮と、十四世紀の時代思潮の影響の問題を論じた。すなわち、鎌倉幕府の後継者として主導権を握るには倒幕活動での活躍を主張する必要があったのだが、尊氏は六波羅探題攻撃の「一戦」にしか関わっていなかった。それを覆うべく、尊氏は自らの「威」の重要性を訴えている。この論理は『太平記』独自のもので、それが作中でも認められていることを明らかにした。そのうえで、尊氏はこうして鎌倉幕府の後を継ぐ主導権を握っていったと考えた。

第二節 武家の棟梁抗争譚創出の理由 ― 新田義貞像の役割 ―

本来、新田義貞は足利尊氏と並び称されるほどの人物ではない。それにもかかわらず、『太平記』ではこの二人を共に武家の棟梁として位置付けている。それは、作者が、義貞も源氏の棟梁とすることでそれを倒した尊氏の棟梁としての絶対性を強調しようとしたためではないかと考えた。また、義貞との対立を前面に出すことにより、尊氏と後醍醐天皇との対立、尊氏の朝敵化という側面を見えにくくする役割も棟梁義貞像にはあると考えた。

第三節 将軍義詮像の性格 ― 四十巻本と足利将軍家との関係 ―

本節では、二代目将軍足利義詮像の検討をおして、現存形態（四十巻本）『太平記』の成立環境について考察した。義詮像は一貫して批判的に形象されているほか、後半部に描かれる守護大名間の争いに無意識のうちに関与してしまっている。この義詮像は、歴史資料から窺える彼の実像とは異なっており、『太平記』ではその無力さが強調されていると考えられる。このような理由から、少なくとも現存形態本が完成した段階では、足利将軍家の意向が『太平記』の生成に反映されていた可能性は薄いのではないかと考えた。

第四節 天皇と将軍／将軍と武将

本節では、『太平記』における将軍の位置付けについて天皇との関係を中心に考察した。これをおして、後半部では『太平記』における武家社会の秩序の変化にも言及している。

すなわち、南北朝期の実状を反映してか、『太平記』でも足利政権を保証する存在としての天皇が描かれている。基本的に將軍と天皇はセットにして描かれているのであるが、天皇を戴いていない時、すなわち朝敵のような立場におかれてしまった時は、將軍尊氏は「運」という超越的要素で守られている。これはライバル義貞像には認められないことで、作者の歴史叙述の方法の一つと考えられる。また、卷十八の尊氏像にも、右のような天皇との関係を意識した作者の論理が投影されている。後半部で天皇と將軍の関係が固まると、両者の関係について言及されることはなくなり、代わりに守護大名の正当性を保証するような存在としての將軍像が描かれるようになる。この將軍像は後期軍記のそれに通ずるものであることも指摘した。

第三章 歴史叙述の方法 — 時代情況との関わりから —

第一節 第一部の構造

本節では、後醍醐天皇の倒幕の様を語る第一部の表現世界の構造を明らかにした。南北朝時代には「承久」に対する二つの時代認識があった。源氏の將軍の世が終わった承久元年と、公家の權威が完全に失墜した承久三年である。作者はこの二つを組み合わせ、「承久」から始まった代が鎌倉幕府の滅亡により終わったという歴史を描いている。すなわち、前半では承久三年の乱により失墜した公家の權威を取り戻すべく天皇が倒幕を行ったと語られていたのだが、卷九で足利尊氏が登場すると、源氏の代を復活させるべく平氏を倒し承久元年以来の雪辱を晴らそうという視点が認められるようになるのである。こうして、「公武」から「源平」の対立へと視点を移動させていき、それが第二部世界で語られる源氏の武家の棟梁の争いの物語へとスムーズに移行させている要因になっていると考えた。

第二節 「食」の表象 — 『太平記』の合戦叙述の一特徴 —

『太平記』以前の軍記物語は、戦場での食料や水の問題についてあまり言及していない。そのような中であって、『太平記』は食料や水が命の基であることを十分に認識し、それを表現世界に反映させている。すなわち、楠正成の智謀を描く場面にも「食」の重要性を認識した叙述が認められるほか、金ヶ崎城落城の凄惨な様子を語るくだりでも「食」が印

象的に用いられている。こういった点に、『太平記』の作品としての一特徴があると考えた。

第三節 本文改訂の一志向 ―細川清氏失脚記事の検討―

『太平記』卷三十六「相模守清氏隠謀露顕事」の本文異同を取り上げ、古態本文（B系統）から改作本文（A系統）へと至る本文改訂には、十四世紀中頃から後半の時代情況が投影されているのではないかと考えた。すなわち、A系統本文は記事を増補したことで、叙述に乱れを生じさせてしまっている。そうまでして語りたかったことは、畠山国清の存在を加えることで、京・鎌倉の執事による足利政権転覆の危機を仄めかしたかったのではないかと考えた。そこには、十四世紀中頃から後半にかけての政治的緊張状態が踏まえられているのではないかと推測した。

第四節 細川頼之の管領就任記事の位置付け

本節では、『太平記』の大尾が細川頼之の管領就任記事となっている理由を、作品成立頃の時代背景との関係から考えた。『太平記』の後半は世の乱れを批判的に語っているのだが、義満の將軍就任と頼之の管領就任でもって世が治まったと、突然作品を語り収めている。このような唐突な終わり方は、作者が頼之を認めていたわけではないが、將軍―管領という社会システムが完成したことを認めざるを得なかったことによるのではないかと考えた。つまり、内実を伴っていると思っていたわけではないが、「序」で示した「君臣」関係が完成したと作者が認識した点に、頼之の管領就任記事で擱筆したことの理由があると考えたのである。

第五節 「序」の機能

本節では、「序」が『太平記』の中で如何に機能しているのかということについて、研究史を整理したうえで考察を加えた。『太平記』の「序」には儒教的徳治思想が理念として示されていて、それが作中随所で批評・批判の基準となっている。その一方で、作中には、その理念が仏教的因果思想等で相対化・否定されてしまっている場面も見受けられるのである。ではなぜ「序」に儒教的徳治思想が選ばれ、四六駢儷体の形で示されたのか。この問題について考えをめぐらせた結果、儒教思想を説く「序」は現世の政道を見つめる

『太平記』の性格を象徴するもので、「君臣」関係という作品構造の枠組みを明示し、理に反した現世を映し出す役割をも果たしているという考えに至った。

第二部 多様化する表現世界 ―中世から近世へ―

第二部では『太平記』の享受の問題を扱った。享受とは、作品世界の新たな構築と言いつ換えられる営為である。第一章では諸本間での本文異同が顕著に認められる「塩冶判官讒死事」を取り上げ、『太平記』諸本各作者の享受の様子を考察した。第二章では、近世に数多く誕生した「太平記」を書名に含む作品を「『太平記』を纏う物語」と称し、その作品群の考察をとおして近世初期における『太平記』のイメージを考えた。

第一章 卷二十一「塩冶判官讒死事」の変相

第一節 諸本の整理と話型分類 (一)

本節では、諸本間の本文異同が大きいことで有名な卷二十一「塩冶判官讒死事」の検討をとおして、中世における『太平記』の本文変化の一端を具体的に明らかにした。約三十本の主要伝本を比較検討した結果、神宮徴古館本型↓西源院本型↓梵舜本型という本文展開の様相のほか、梵舜本型は天正本型との共通祖本から派生したこと、梵舜本型の成立下限は宝徳四年(一四五二)であること等を具体的に示した。

第二節 諸本の整理と話型分類 (二)

前節で扱えなかった「塩冶判官讒死事」の本文異同の問題を論じた。「塩冶判官讒死事」の基本型である神宮徴古館本型が二種五系統に整理できることのほか、竹柏園本『平家物語』に取り入れられた『太平記』の本文は、現存諸本中、龍門文庫蔵豪華精本とのみ一致することを明らかにした。また、西源院本本文に太平記読みの名残がある可能性を指摘したほか、吉川家本や前田家本の特徴を明らかにした。

第三節 諸本の独自性と共通性

本節では、「塩治判官讒死事」が如何に享受され変容していったのかについて考えた。中世・近世の「塩治判官讒死事」を享受した物語や浄瑠璃等との比較を踏まえ、『太平記』諸本に共通した志向性を明らかにした。すなわち、天正本が物語の構造にまで手を加え塩治の悲劇を強調しているように、諸本の作者は各々独自の改訂を行っている。だが、その一方で、『太平記』諸本はすべて師直批判という基本的な枠を崩していない。ここに、「塩治判官讒死事」を享受した作品とは一線を画す『太平記』の「塩治判官讒死事」の特徴があると考えたのである。また、「塩治判官讒死事」の本文改訂の様からは、政治権力とは関係を持たない観点からの『太平記』享受のあり方も窺われるということを指摘した。

第二章 「太平記」を纏う物語 ―近世初期『太平記』享受の一齣―

第一節 『獣太平記』と『魚太平記』

近世に数多く誕生した、書名に「太平記」を含む作品の中から、近世初期に誕生した物語群を取り上げた論考の一つである。本節では、『獣太平記』と『魚太平記』について考えた。『獣太平記』は十五世紀前半までには成立していた室町物語『十二類絵巻』を版本にした作品であるが、画中詞を削ったり絵巻の意図を解せず絵を変えてしまったりしている。『獣太平記』には「合戦」以外には『太平記』を想起させるような叙述は特に見えない。もう一つの作品『魚太平記』は、合戦場面を持たないにもかかわらず「太平記」という名を取り込んでいる。そうすることにより、あたかも合戦を語る物語のような印象を持たせようとしたのではないだろうかと考えた。

第二節 『草木太平記』と『諸虫太平記』

本節でも、十七世紀中葉に相次いで刊行された「太平記」という名を書名に持つ軍記物語のパロディ作品群に考察を加えた。『草木太平記』は『太平記』巻二十一「塩治判官讒死事」を利用した初期の作例で、「塩治判官讒死事」の表現から草と木に関する叙述を取り上げて、草・木に関する部分をそれぞれに区分したうえで作品世界の形成に利用しているほか、横恋慕の成就という新たな物語を創出している。『諸虫太平記』は、筆者の考え

では、明暦元年（一六五三）～天和三年（一六八三）の間に成立したと考えられる。これまで、この作品は『太平記』を強く意識しているという指摘もなされていたが、その論拠は薄弱であるように思われる。この作品も『太平記』に影響を受けたからこそ「太平記」を書名に取り入れたというわけではあるまい。こういった先行研究の検証を踏まえて、『諸虫太平記』では、「太平記」を「大乱」の顛末の代名詞として認識しているということとを指摘した。

第三節 『貧人太平記』

本節では、十七世紀後半に成立した物語『貧人太平記』が、『太平記』をどのように取り込んでいるのかについて検証し、作品の唐突な終わり方は『太平記』の構成をまねした結果であると結論付けた。これは、権力に対するカモフラージュのために唐突な終わり方をしていくという従来の説に対する疑問を呈したものである。そのうえで、この作品にわたっての「太平記」とは〈乱↓泰平〉を意味すると考えた。

付論 「太平記」を纏う物語の可能性 ―『慶安太平記』を軸として―

ここでは、作品名に「太平記」を有する作品群の研究から何が見えてくるのか、その可能性について考えた。すなわち、実録『慶安太平記』および黄表紙『太平氣』を取り上げ、楠正成像の問題をとおして、近世社会における『太平記』の影響・享受の様相について考察した。『慶安太平記』は『太平記秘伝理尽鈔』等の太平記評判書を踏まえていること、その『慶安太平記』を踏まえてさらに新たな作品世界を形成しているのが『太平氣』であることを具体的に論じた。つまり、『太平記』↓『太平記秘伝理尽鈔』等の太平記評判書↓『慶安太平記』↓『太平氣』という、広い意味での『太平記』享受の大きな流れを具体的に示したわけである。

『慶安太平記』や『太平氣』といった『太平記』の名を書名に取り込んだ作品は、近世のみならず近現代までも、ジャンルの壁を越えて数多く見られる。こういった作品群をへ太平記もの」と一括りにし考察することは、日本文化を考えるうえで有効なのではないか。

本論では以上のことについて考えた。